

中学校第1学年 E 球技 イ ネット型「バレーボール」 小竹町立小竹中学校

単元の目標

知識及び技能	競技の特性や行い方、ボール操作等について理解するとともに、基本的なボール操作と定位置に戻るなどの動きにより空いた場所をめぐる攻防ができるようになる。
思考力、判断力、表現力等	攻防における自己やチームの課題を発見し、合理的な解決に向けた運動の取り組み方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができるようにする。
学びに向かう力、人間性等	バレーボールの学習に積極的に取り組むとともに、一人一人の違いに応じたプレイなどを認めようとする事、健康・安全に気を配ることができるようにする。

※共：男女共習

		1	2	3	4	5	6	7	評価規準	
ねらい	競技の特性やボール操作等について理解するとともに、自己の課題を見つけることができる。	基本的なボール操作（オーバーハンドパス、アンダーハンドパス、アンダーサービス）を身に付け、簡単なゲームを楽しむことができる。				チーム全員が活躍するために、ルールを工夫し、空いた場所をめぐる攻防を楽しむことができる。				【知識・技能】 ①オーバーハンドパス、アンダーハンドパスの動きのポイントを理解している。 ②パスとレシーブでボールをコントロールすることができる。
	準備運動（ストレッチの紹介を兼ねる）	共：心と体をほぐすために、チームでコミュニケーションをとりながら準備運動を行う。（ペアやチームでストレッチ、ボールを使っのストレッチや補強運動等）								
導入	競技の特性や行い方、基本的な動きについて理解することができるように、映像等を使って説明する。	動きのポイントを提示し、オーバーハンドパス・アンダーハンドパス）の練習を行う。  共：生徒が自分の技能に合わせて練習に取り組むことができるように、バウンドの回数（ノーバウンド、ワンバウンド以内、ツーバウンド以内）を生徒が選択できるようにする				チームの構成：1チーム3～4名（6チーム） コートの使用：3チームで1コート使用（A対Bのゲーム中、Cが動画を撮影する時間とする。） 行い方：1チーム3～4名、5分間、通常のコート ゲーム1：A対B、A対C、B対C （各チームのプレイ時間を保証するため、時間制で行う。）				【思考・判断・表現】 ①仲間と協力する場で、分担した役割に応じた活動の仕方を見つけている。 ②自分や仲間が全力ゲームを楽しむための方法を見つけ、仲間に伝えている
	ボール操作やプレイ中の動きの課題を見つけるために、試しのゲームを行う。	共：生徒が仲間と関わり合いながら繰り返しボール操作に挑戦できるように、2人組で行う練習方法、4人（チーム）で行う練習方法を提示する。				共：①試合終了後、チーム全員が活躍するためにどのような工夫が必要か考える。 コート内の人数、コートの大きさ、バウンドの回数、コンタクトの回数等 ②考えた工夫を対戦チームに伝え、ア：両チーム共通で設定すること、イ：チームごとに設定すること、を確認する。				
展開	1チーム3～4名（男女混合）とする。	練習した動きを全員で確かめるゲームを行う。 行い方：1チーム3～4名、5分間、通常のコート 共：生徒が練習の成果を実感できるように、バウンドの回数（個人）、コンタクトの回数（チーム）を制限したゲームを提示し、対戦相手との話し合いのもとに選択できるようにする。				ゲーム2：A対B、A対C、B対C （各チームのプレイ時間を保証するため、時間制で行う。）				【主体的に学習に取り組む態度】 ①学習に積極的に取り組むもうとしている。 ②マナーを守ったり相手の健闘を認めたりして、フェアなプレイを守ろうとしている。
	今後の学習の見通しをもつことができるように、ボール操作やプレイ中の動きについての課題を話し合う。	バウンドの回数⇒A：ノーバウンド、B：ワンバウンド以内、C：ツーバウンド以内 コンタクトの回数⇒A：3回以内、B：4回以内、C：5回以内				自分や仲間が活躍できたことを確かめるために、ゲーム2の様子とゲーム1の様子の動画を見て比較し、工夫の効果（楽しさ・触る回数・ラリー回数・ボールを持たないときの動き）を確かめる。 次時学習への見通しをもつことができるように、効果のある工夫について全員で共有する。				
終末	振り返り（授業後アンケート）の記入									

知識・技能		①		①		②			②
思・判・表						①		①②	②
主	①								②

## 個人やチームの課題解決に適した活動やルールの工夫

### 中学校第1学年 E 球技 イ ネット型「バレーボール」

小竹町立小竹中学校

#### 1 単元の目標

○競技の特性や行い方、ボール操作等について理解するとともに、基本的なボール操作と定位置に戻る動きにより空いた場所をめぐる攻防ができるようにする。

##### 【知識及び技能】

○攻防における自己やチームの課題を発見し、合理的な解決に向けた運動の取り組み方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができるようにする。【思考力、判断力、表現力等】

○バレーボールの学習に積極的に取り組むとともに、一人一人の違いに応じたプレイなどを認めようとする事、健康・安全に気を配ることができるようにする。

##### 【学びに向かう力、人間性等】

#### 2 共生を基盤とした授業づくりにおける仕掛け

##### (1) 個人の技能に合わせて取り組むことができるための工夫

本実践の基本となる技能として、パスを行う際のボールコントロールがあげられる。この基本的な技術が不十分な場合、チームに迷惑をかけてしまうという理由からボールをできるだけ触らず、コートにただ立っているだけになってしまう生徒が出てしまう。これを解消し、男女差や技能差を補うことができ、ボールに積極的に触ろうとする意欲を引き出すために、生徒が自らの技能に合わせてバウンド回数（ノーバウンド、ワンバウンド以内、ツーバウンド以内）を選択できるようにした。その際、バレーボールの動きの特性として、ボールの落下点に動くことが求められるため、最初はノーバウンドから挑戦させ、それが難しい状況の場合はバウンドしたボールを操作できるようにした。

##### (2) チームの技能に合わせたルールの工夫

チームの技能に合わせたルールの工夫として、コンタクト回数を選択できるようにした。回数は3回以内、4回以内、5回以内を選択させることとした。また、パスゲームを行う際、1人の生徒が1回で相手コートへ返球し他の生徒がボールを触れないようなことが起こらないために、コンタクトの最低回数も設定させ、より多くの生徒がゲームの中でボールを触る機会を増やすようにした。

##### (3) 生徒同士が学び合いながら行う工夫

生徒がボール操作に挑戦する場面では、仲間と関わり合いながら活動できるように、2人組や4人組でできる練習方法を提示した。また、生徒が自分たちのチームの動きを客観的に捉えることができるように、ゲームを行っていな

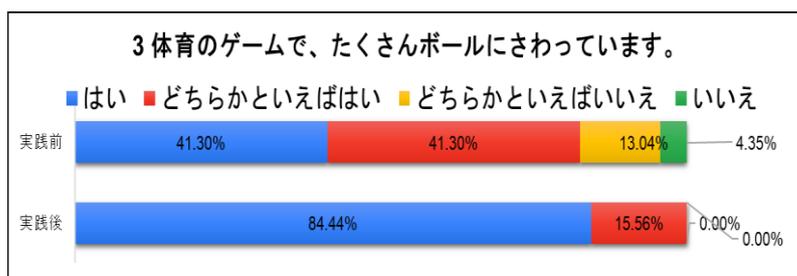


いチームの生徒にタブレットで動画を撮影させた。その動画をチームで確認し、自分や仲間が活躍できたかどうかを確かめさせ、どのような工夫をすればより自分や仲間が活躍できるかを話し合わせた。話し合う視点としては、楽しさ、1人1人がボールに触る回数、ラリーが続けられた回数、ボールを持たないときのカバーの動きである。この視点に沿ってチーム内の話し合いを行わせ、ゲームを重ねるごとにチームの連携が高まっていくことを目指した。

### 3 成果と課題

#### (1) 成果

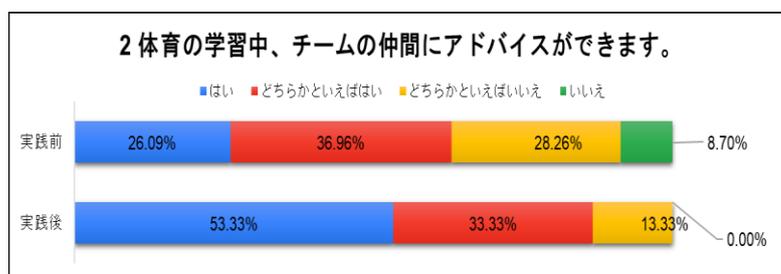
- 単元前後に行った「体育の学習に関する生徒アンケート(21項目質問紙アンケート)」において、たくさんボールにさわっていると回答した生徒が大幅に増加したことから、個人



人やチームの技能に合わせてバウンド回数やコンタクト回数を選択できるようにしたことで、単元を通して技能差に関わらず意欲的に学習に取り組むことができた。

- チームの課題解決をする上でゲーム中の動画を撮影し、その動画を基に話し合う活動を設定したことで、自分たちの動きを客観的に見ることができ、ボールを持たないときのポジショニングや動きだしを速くするための基本の構えができるようになった。その結果、今まで失点していたボールを繋ぐことができるようになり、ラリーが続く楽しさを味わうことができた。

- 単元前後アンケートにおいて、仲間にアドバイスができると回答した生徒が大幅に増加したことから、ゲームを行う際に、チームの技能に合わせルールを工夫したこと、練習の際



に、2人組、4人組と、仲間と関わり合う活動を設定したことにより、単元を通して男女差、技能差に関わらず生徒同士が学び合う学習が展開できたと考える。

#### (2) 課題

- 今回、生徒のパス技能を補うためにバウンドしたボールを操作できるようにした。しかし、バウンドしたボールを操作した生徒は、バレーボールの1つの特性であるボールの落下点に入る動きを身につけさせることが不十分であった。そこで、重さや落下速度が異なり、操作のしやすいボールを選択することができるようにするなど、用具を工夫することでバレーボール本来の特性を失うことなく操作の不安を軽減できるための工夫が今後必要である。